

二十一代集における体言止めについて

二十一代集における体言止めについて

新古今集の特色として列挙されるものに、体言止め、本歌取り、初句切れ・三句切れなどがあることは周知の事実である。

このうち体言止めに關しては、つとに楠守部により、実語という表現を用い、その位置によつて、上実、中実、下実という事が論ぜられ、新古今集においては下実に屬する歌が多いという事が論ぜられているのであるが、更に明治に入つて、鴻巣盛広氏により「新古今集を概説して序に代ふ」(『新古今和歌集遠鏡』所収)において論ぜられて以来、本歌取り、初句切れ・三句切れとならんで、新古今集の特色としてあげられるに至つたのである。しかしながら鴻巣氏の場合及びそれ以後においても、論

武内章一
井上寿彦
加藤英夫
小池藤英
山口邦子

及の対象となつている範囲は万葉集及び八代集についてであり、二十一代集全部にまでは及んでいない。そこで二十一代集全部を調べてみたらどのような結果になるであらうかということでは私たちはこの研究を行つたのである。

私たちのこの研究の目的は、二十一代集においては、体言止めの歌が何首あり、それは全歌数の何パーセントを占めるかを調べ、その結果をもとにして、たとえば体言止めに關してはどの集がどういふ特色を持つとか、あるいは四季の部と恋の部によつて体言止めはどう変化するかなどということにまで問題を発展させることになつたのである。

なおテキストは国歌大観本を使用し、短歌と異なる歌体

のとりあつかいも、長歌、旋頭歌、連歌等歌体の如何にかかわらず短歌と同じように取扱つた。

体言止めとは、名詞止めともいわれ、通常短歌の第五句を体言で終える修辭法である。国語学辞典のことばによれば、「短詩型の和歌にとつては、素材を重点的に、より豊富に盛ることのできる効果的技法」ということができるのであり、久松潜一博士・岡崎義恵博士・山崎敏夫氏・江湖山恒明氏をはじめ、先人によりすでにしばしば述べられた如く、第五句を体言によつて終えることによつて、歌に余情・余韻をもたせ、三十一字という短形式において倒置省略による複雑さを読者に味わわせるという効果があるのである。

ところで江湖山恒明氏はこの体言止めについて、その著「日本文学史」の中で次のようにのべられている。

「文の終りに体言、または体言を中心にした文節が用いられている場合としては、次の二つが考えられる。

第一は、『鳴き渡る 雁の涙や 落ちつらむ もの思ふ宿の 萩の上の露(古今集)』のように、倒置法によつて、文の終りに用いられている体言(露)から成る文節に対応する述語(落ちつらむ)は、文の終りに用いら

れている体言よりも前の部分に、はつきり用いられている場合である。

第二は、『時しもあれ たのむの雁の 別れさへ 花散るころの み吉野の里(新古今集)』という作品の下の句が、『花散るころのみ吉野の里(は悲し)』と解釈されているように、文の終りに用いられている体言から成る文節に対応する述語は作品の中のどの部分にも言い表わされておらず、省略の形がとられている場合である」と体言止めの二つの場合をあげておられるが、形の上からは名詞で終わることにかわりはない。そして江湖山氏はさらに「体言止めと用言止め」(時代別作品別解釈文法所収)の中で、前記の体言止めの他に、

あさ緑糸よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か(古今集)

など体言十助詞止めの作品を挙げ、このような種類のものを、体言止めに近い性格のものだと考えることが許されるとすれば、これらを加えたものが、広い意味での体言止めとして考えられるとされている。

この考え方をさらにおしひろげられたのが、山崎敏夫氏の「体言止めの四つの場合」と「体言止めに準ずるもの」(「講座『解釈と文法』2 記紀歌謡・万葉集・古今

集・新古今集」所収)である。「体言止めに準ずるもの」の中で山崎氏は、

いまさらに雪ふらめやもかげろふのもゆる

春ひと成りにし物を

梅が枝に物うき程に散る雪を花ともいはじ

春の名立に

などの例をあげられ、「このような歌はいちおう体言止めに準ずるものと考えてよいと思われる。これらの中には体言止めに非常に近い関係のものと、体言止めからはやや離れた感のするものがあるが、撰集の上でたまたま並んで見えている、

秋の色はまがきにうとく成りゆけど手枕なるる

ねやの月かけ

秋の露やたもとにいたく結ぶらん長き夜あかず

やどる月哉

などという歌の場合を見ると、体言止めの歌と体言止めに準ずる歌とが表現の上でいかに親近性をもつかが明らかになることであろう」とされている。

山崎氏はさらにもう一つの場合を指摘されている。

郭公深き宿より出でにけりとやまのすそに

声のおちくる

などがそれで、ぞ・なむ・や・か等の係りの語をまつたく持たないで、歌の第五句が活用する語の連体形でむすばれる場合である。

たゞその場合に、

山里は道もやみえず成りぬらん紅葉と共に

雪のふりぬる

などは、上句に「道もやみえず成りぬらん」とあつて、それが係りとなつて下句がみちびき出されているようにも形の上では一見見えるが、この歌の場合はそう解いては意味をなさないことになるから、やはりこれは三句ではつきり切れるものとして解くべきものである。したがつてこの一首は、

梅ちらす風もこえてや吹きつらんかをれる

雪の袖にみだるる

などという歌とは、構造の形式は似ていても、上句から下句への意味の通いは異なる歌であると考えられるのであるとされ、したがつて、前者「山里は」の歌は体言止めの歌に準じて考えてよいが、後者「梅ちらす」の歌はそうは考えないのであるとされている。

そこで私たちは、この先人たちによつて、つみ重ねられた卓見を充分尊重しながら、純粋な体言止めと体言止

めに準ずるものとの二つの場合について各々調査したものであるが、たとえば、

桜花ちらばちらなむちらすとて古里人の

来ても見なくに

のような「なくに」で第五句が終る歌とか、前述の如く上句に係結ひの關係があり更に第五句が活用語の連体形で終つている場合、体言止めに準ずると考えるか否かの問題に多少の疑問をさしはさんで未解決の部分を残すので、この稿ではとりあえず、純粹な体言止めだけの調査の結果を報告するにとどめ、体言止めに準ずるものの報告は稿を改めて発表したいと考えている。

二十一代集における体言止め（以下すべて純粹の体言止めの意味で使用する）の歌は、「表1集別体言止め」からわかるように、全歌数三三三九首中、六七九七首、二〇・一%となり、約1/5となつている。「表2集別体言止めグラフ」は、「表1集別体言止め」に見られる結果を、グラフにして示したものであるが、このグラフは我々に和歌史の流れを考える上でいろいろの事を示してくれるのである。

先ず第一にこれによつて知られる事は、体言止めの歌は、古今集から詞花集までは比較的少なく、千載集で稍々増加し、新古今集で急激に多くなつてゐる事である。そして、新古今集以後においては、新勅撰集と続後拾遺集とを除いては、各集とも体言止めの歌はその平均である二〇%を越えているのである。いま体言止めの歌の多い集から順に少しあげると、

	体言止め	総歌数	%
風雅集	六五七	二二一一	二九・七
続拾遺集	四〇八	一四六一	二七・九
新統古今集	五七三	二一四四	二六・七
新後拾遺集	四〇九	一五五四	二六・三
新拾遺集	四七八	一九二〇	二四・九
玉葉集	六八六	二八〇二	二四・五
新古今集	四六九	一九八一	二三・六

の如くであり、八代集において最も多い数値を示した新古今集は、二十一代集を通じて見る時は実に第七位に位するものである事が知られるのである。かくて新古今集の特徴の一つとしてあげられる体言止めは、八代集においてはその優位を主張し得るのであるが、二十一代集全體を通じては、表2に示されるグラフにおける、幾つか

の峯々の中登山口から第一番目の峯に位するといふ地位は許されるとしても、高さからいえば第七位に甘んじなければならぬといふ結果が導き出されるのである。この事は勅撰和歌二十一代集の歴史を考へる際、改めて検討を要求される問題であり、中世和歌史の初期に燦然と輝く新古今集の後をうけて、十三代集が新古今集を範としてこれに倣つた結果、このような様相を示すにいたつたと考へるべきか、中世といふ時代の風潮の底に、真に体言止めの技法からかもし出される雰囲氣を愛好させるものがあり、自ずとこのような様相を呈するに至つたと考へるべきか、なお今後の課題として考へてゆきたい。しかしともあれ、新古今集においてこれまで強調されてきた体言止めの特徴は、これまでとは異つた意味において、即ち連峯のうち、登山口に最も近い第一峯としての特徴を持つものとして考へ直されねばならないといふ事はいろいろものと考へられる。

第二にこの表のグラフにおいて認められる事は、先にも述べた如く、新古今集以後において、新勅撰・続後拾遺の両集が体言止めの歌の少ない事である。そしていま、続後拾遺集についてみる時、これは風雅集の峯に對して、新千載集とともに谷をなしている集であるといふ事がい

えるのであるが、この続後拾遺・新千載両集が風雅集をばさんで谷間を形成している事は、両集の撰者として（続後拾遺集は為藤が中途で没し為定が継ぐ、新千載集は為定）の二条為定と無関係ではなさそうであると考えられるが、如何であらうか。そしてこれと同じような状況は、玉葉集の峯に對する新後撰集と続千載集との両集においても認められるのである。（但しこの場合、新後撰集は谷底ともいふべき位置に位するのに對し、続千載集の場合は谷底ともいふべき位置には次の続後拾遺集が位して居り、状況は全く同じとはいえないにしても）。そしてこの両集の性格も、その撰者二条為世とは無関係ではなさそうであるが、如何であらうか。そしてまた新勅撰集の場合は、いう迄もなく、後撰集以後新古今集までずつと上昇カーブを描いて来たのが、この集において初めて下降カーブとなつてあらわれている所に、大きな意味があるのであり、新古今集と新勅撰集を考へる上に、またその両方に関係している藤原定家を考へる上に、大きな意味を持つものといえるのである。

第三にこの表のグラフにおいて認められる事は、先にも述べた如く、古今集から詞花集に至るまでの集は、後撰集を最下位として、

体言止め 総歌数 %

後撰集	五九	一四二六	四・一
古今集	六三	一一〇〇	五・七
拾遺集	七九	一三五一	五・八
後拾遺集	九七	一二二〇	八・〇
金葉集	六二	七一三	八・七
詞花集	四一	四一三	九・九

の如く、いずれも一〇%以下という結果を示し、千載集以後とは著しい相違を示しているのである。(なお此の場合、千載集は詞花集以前と、新古今集以後をつなぐ橋渡しの性格を有し、過渡的性格ともいうべき数値を示しているのであるが、この事は和歌史における時代区分の問題とも関連して、千載・新古今両集に中古的なものと中世的なものとの両性格を認め、過渡的な性格のものと考えつゝ、千載集から中世和歌史を書き起そうとする最近の説に対し、体言止めという面から一つの有力な支柱を与え得るといえないであらうか。)そこで今考察したところに従つて、体言止めの比較的にならない古今集から詞花集までのグループ(以後甲グループと称する)と、全体として体言止めの増加の著しい千載集から新統古今集までのグループ(以後乙グループと称する)とに分け考

える時、それでは、甲グループに比し乙グループに見られる著しい体言止めの増加は、どのような状況の下に増加が見られるかという問題が起つてくるのである。即ちよまれてある歌の如何をとわず、各部立の別なく、各部平均して乙グループにおいて増加が見られるのか、それとも部立によつて相違が見られるのかという事が問題となるのである。しかしこの問題の解明のためには、甲グループと乙グループとの細部にわたつての精密な比較が必要であり、しかもこれはいろいろな問題を含んで極めて困難な事なのである。たとえば、部立に関して、物名という部立を有する集は極めて少ないし、また神祇・釈教の部に関して、之を有する集と有しない集とはどのように扱ふのか、また四季部・恋部の他に、雑春・雑秋・雑恋の部をたてる集の場合、どのように扱ふのかなどの問題や、またその他二十一代集を通じて一律に律する事を得ないいろいろの場合があり、精密な比較という事は極めてむづかしい事といわなければならぬ。このように、この問題の解明には困難が附随するのであるが、なお危険をおかして一つの考えを進める事を許されるならば、次のような事がいわれるかと考えられるのである。即ち二十一代集を通じ常にその部立が設けられその歌数

も多いところの四季の部と恋の部、それにその中間的存在ともいべき雑の部（雑部については、この部に属する歌はいうまでもなく、最初から雑の歌として詠ぜられたものもあるが、他に四季・恋・賀・哀傷・離別・壽旅等の歌としてよまれた歌で、集編纂の都合上、それぞれおのしかるべき部に収録されなかつたものが、いろいろ集められている部ともいえ、この際四季部・恋部とは同格には考え得ないのであるが）と、三つの場合をとりあげて、その各々に含まれる体言止めについて調べてみると、表3の如くであり、更にこの結果をわかりやすくするためにグラフで示すと表4の如くなるのである。このグラフより知られることは、

(1) 全体を通じ（二、三の例外はあるにせよ）、体言止めは四季部に多くみられ、恋部には少なく、雑部における体言止めは、両者の中間をゆく折線としてあらわされている。

(2) 甲グループ、乙グループの二グループに分けてみる時は、四季部においては、甲グループは九%前後の低率であるのに対し、乙グループでは、千載集・続後拾遺集の両集を除いては、三〇%を越えているのである。

換言すれば、四季の歌においては、甲グループと乙グ

ループの間には、はつきりした断層のある事が認められるのである。

(3) これに対し、恋部について見る時、甲グループ・乙グループにおいて、そこには四季部にみられるような顕著な現象は見ることを得ないといつてもよい程の状況が見られるのである。勿論恋部においても、甲グループに比し乙グループの方が体言止めの歌が多いという事はいえども、この両グループの間には、四季部ほどはつきりした断層は認められないのであり、体言止めが多く見られる集としては、新古今集と続拾遺集とがみられるだけである。体言止めは象徴的歌風の技巧として多く用いられたのであるが、それは意外に恋部には多く使用されていない事が知られるのである。

(4) 以上みて来た所の(2)と(3)から、千載集以後の乙グループが体言止めを多くもつといつても、前記三つの部立中どの部立においても平均してふえたというのではなく、四季とか或は雑の部にかたよつて、体言止めの著しい増加がみられ、恋部においては、それ程体言止めの増加は認められないという事がいえるのである。

（また四季と恋の歌については、純粹の体言止めばかりでなく、江湖山氏・山崎氏の所謂体言止めに準ずる

ものの調査においても、非常に興味深い結果を得たのであるが、次の機会に譲りたい。))

(5)これは(1)でもふれたことであるが、四季部と恋部にあつては、それぞれの折線は、古今集より新続古今集に至るまで、両者決して相交わる事なく、四季の部に比較して恋の部における体言止めの割合が平均して低いのである。そのことを少し考えてみたい。いま四季部の折線で最高の峯を示している統拾遺集に例をとつてみよう。四季の部においては総歌数四七〇首の中、体言止めの歌は二〇二首、四三・〇%であるのに対して、恋の部においては総歌数三三一首の中、体言止めの歌は五二首、一五・七%を占めている。(この率は新古今集の一六・六%に次いで恋の部の中では二番目に高いものである。)そして恋の部における体言止めの際に使用されている体言の性格は、四季の部の体言止めの場合の性格とは非常に違つていふ事が認められるのである。即ち、第一には恋の部における体言止めは、その体言が詠せられる目的としてよまれているのでなく、恋の情をあらわすための手段として用いられているという事と、第二にはその体言止めは述べられようとする恋の情によつて著しい限定をうけ、四季

の部に見られるような自由さというものが認められな
いという事である。

たとえば「忍ぶ」というために「忍ぶもじずり」と結ぶもの(七六九・七七〇)、忍恋という題に應じて「まだしらすげの真野の秋かぜ」と結ぶもの(七八四)、その他「人をみぬめの浦の藻しほ火」(八三六)、
「逢事はさてもかただの浦のあだ浪」(九一六)など、
いずれも「忍ぶ」「まだしらす」「人をみぬ」「逢事はかたし」という言葉にひかれて出て来たものである。また歌枕として有名な「末の松山」で結ばれている歌にしても(一〇二六・二八)いずれも「波こそ」即ち心変りすることをいうために使われている。また
「有明の空」(九〇六、九二八・九二九・九七四)、
「有明の月」(九〇七・九三七・九五六・五八)などの恋三・恋四に多く用いられる体言止めも、待恋・曉別恋などの感情を詠ずるための一種の手段にすぎないのである。このように恋の部の第五句に用いられる体言は、恋の情に関連して導き出されるといふ限定をうけた性格のものであり、四季の部の第五句に用いられる体言が、或いは四季の景物に、或いは四季の名所に、或いは四季の天象にと、融通無碍に求められ来つてい

るのに比し、その取材の自由さにおいて格段の差がある事が見てとられるのである。また四季の部においては第五句の体言そのものが詠歌の対象・目的となつてゐるのに対し、恋の部においてはそれは目的である恋の情を述べるための手段である場合が多いのである。その他寄枕恋・寄杜恋・寄滝恋・寄檻恋・寄秋月恋・名所恋など、更に具体的に「寄一恋」といつた性格の題詠歌にも留意する必要があるが、以上あげたどの場合も、体言そのものは実質的にはさほど意味を持たず、いずれも寄物陳思の一段として用いられているにすぎないのである。この事は四季の部と恋の部との題詠歌の関係とも似たものとして解しうるのである。即ち題詠歌において、四季の歌においては、その景物といい、はたまたこれに関連する名所といい、有形の対象をいくらかでも持ち来つて題を設定する事が可能であるが、恋の歌においてはその心情の変化は無限であるとはいへ、無形の心情の狀態に対し題を設定するためには、自然そこに限界が生ずるのであり、ために「寄一恋」といつた恋歌本来の性格からすれば、不自然な題の設定にまで及ぶのである。そしてこのように恋の部における題の設定がむつかしいのでとくに、恋の部の

第五句に体言止めの技法を求めるとしても、それにふさわしい体言は前にも述べた如く恋の心情に関連して導き出されるものという限定された性格を持つものとして、四季の部の場合の如く容易には求められ得ないという事がいえるのである。このように体言そのものが恋の情をのべるための手段として用いられ、四季の部の如く目的としてのべられる事が少ないため、また恋の情に関連して導き出される体言という限定をうけるため、あまり重要な位置をしめず、四季の部の歌などにみられるような体言止めの技法の如く、あまり有効なものとして考えられなかつたのでないかと思われ、るが如何であろうか。恋歌では恋の情をのべるための手段として体言止めが用いられる事が多く、従つて恋の情は多くはその体言をかりて間接に表現されるという結果になり、生々しい感情を直接に吐露するといつた事からは程遠い表現となるという事がいわれるのであり、その結果として、体言が第五句に来る事が四季の歌に比べて少なくなるといえるのでなからうか。勿論例外もあるのであるが、それは体言止めに用いられる体言そのものに重要な意味がある場合に限られるようである。

結局、第五句に置かれる体言の重要性の有無、その体言が目的となつているか手段となつているかという事により、四季の部と恋の部に見られるこの顯著な体言止めに關する性格の相違という事も出てくるのではないだらうか。

以上二十一代集を通じて見られる体言止めについて考へてきたのであるが、これをこれまでの和歌史の通念とされて来たものと併せ考へるとどのような事がいい得るかについて、最後に概観を試みておきたい。前記甲グループにおいては、和歌史の通念として、後拾遺集、金葉集がとり上げられ、それぞれの新傾向が指摘されて、和歌史上の一屈折点をなしているといわれているのであるが、体言止めという点からはさして目新しいものは見出されないのである。これが乙グループに眼を転じて千載集になると、体言止めを示す折線は急カーブで上昇し、新古今集になると更に上昇を示し、八代集中最高のものとして、新古今風の特徴の一つとして数えられるに至つている事は前述の如くである。そして十三代集中玉葉・風雅の新風として直ちに思い浮べられる二集にあつては、

風雅集は実に二十一代集中最高の数値を示し、玉葉集も第六位をしめ、体言止めの面からもその新風を主張するものという事を得るとともに、一面また玉葉二四・五%と風雅二九・七%との相違は、玉葉・風雅の新風と称されるものが、等しく京極派の歌風に基づく撰集でありながら、細部にわたつてはなお互に相違するものを示しているといわれる一つの例をも示すものとなつていのである。そして乙グループ最後の新統古今集にあつては、撰者は御子左家をはなれて飛鳥井家にうつり、新古今集の撰者飛鳥井雅経の後裔雅世により撰ばれた結果、いろいろ新しい傾向が示されているといわれるのであるが、体言止めの面からも二十一代集中第三位をしめ、新傾向を形成する一要素となつていふ事を得るのである。このように甲グループにおいては、体言止めはその集の新傾向を形成する要素とまではたち至つていないのであるが、乙グループにおいてはその集の新傾向を形成する要素としてこれを認めることを得るのである。これら諸集に対し、これまで余り新傾向を示すものとしてあげられる事なかつた渠の中で、体言止めという点では大いに特色があると認められるものに統拾遺集と統後拾遺集

とがあるのである。続拾遺集にあつては、集全体からみる時は二七・九%、第二位に位し、四季の部にだけついでみる時は二十一代集中第一位、恋の部だけについてみる時は新古今集について第二位を示す結果となつてゐるのである。これまでの和歌史において、続拾遺集はたとえその名があげられ一応解説が加えられる事はあつても、その特色が特に取上げられ云々される事は少なかつたのであるが、この集は体言止めに限らず、恋の部の配列についても特異なものが認められ、また選歌範囲についても、当時にあつては一異色を示しており、そうした面では撰者為氏の撰集意識は高く評価されてよいと考えられ、

それについてはいずれ改めて考察を行いたい。この続拾遺集とは反対に著しく体言止めが少ない集として続後拾遺集があるのであるが、これについては既に考えた所でもあり、詳細は省略に従いたい。撰者為定を考える上に忘れられてはならない事といえよう。

以上体言止めについて、私達の行つた調査をもととして一二の考察の結果を発表したのであるがもとより満足なものではない。大方の御叱正を願うと共に、更に今後この調査の結果をもととして、残された課題の研究を続けたいと考える。

表1 集別体言止め

	総歌数	体言止め歌数	体言止め 歌数 ——×100 総歌数
古今集	1100	63	57
後撰集	1426	59	41
拾遺集	1351	79	58
後拾遺集	1220	97	80
金葉集	713	62	87
詞花集	413	41	99
千載集	1287	172	134
新古今集	1981	469	236
新勅撰集	1376	263	191
続後撰集	1377	295	214
続古今集	1925	399	207
続拾遺集	1461	408	279
新後撰集	1612	354	220
玉葉集	2801	686	245
続千載集	2148	467	217
続後拾遺集	1355	253	187
風雅集	2211	657	297
新千載集	2364	513	217
新拾遺集	1920	478	249
新後拾遺集	1554	409	263
新続古今集	2144	573	267
計	33739	6797	201

表 2 集別体言止めグラフ

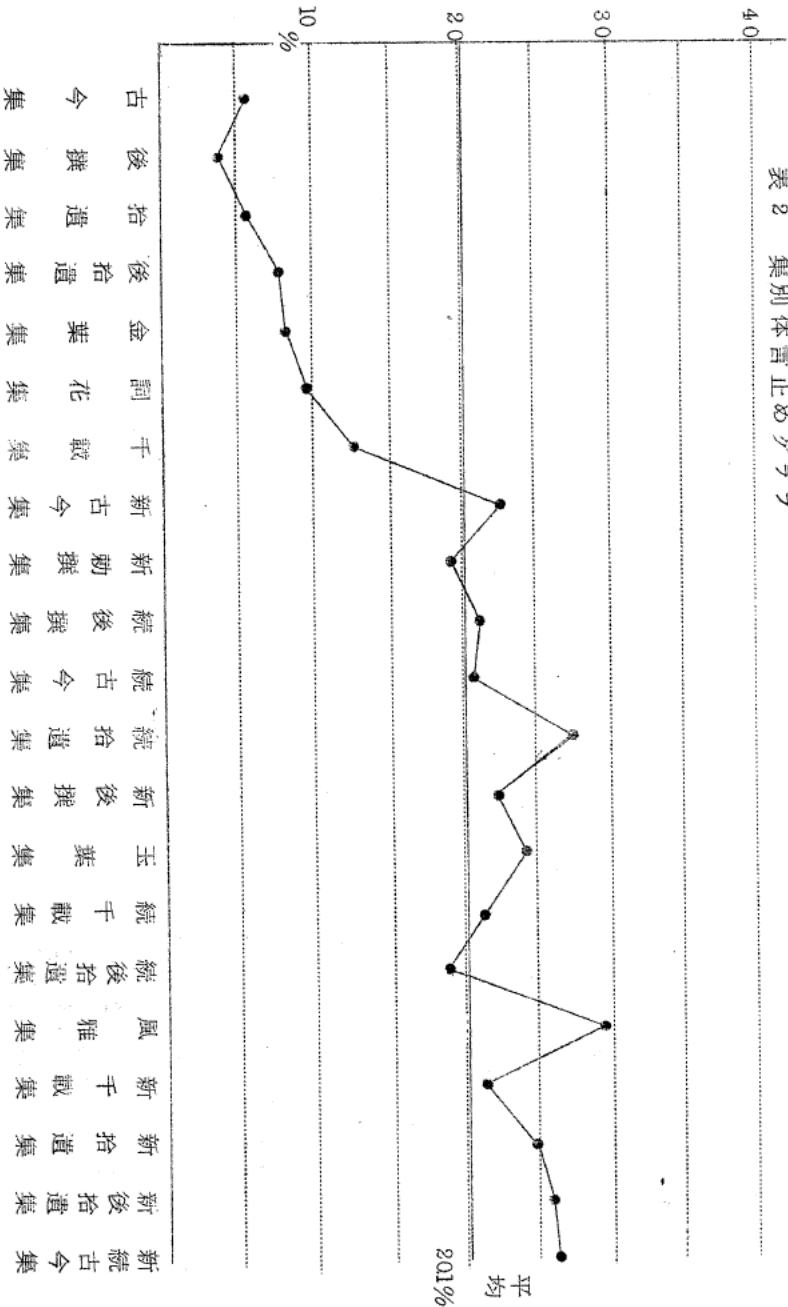
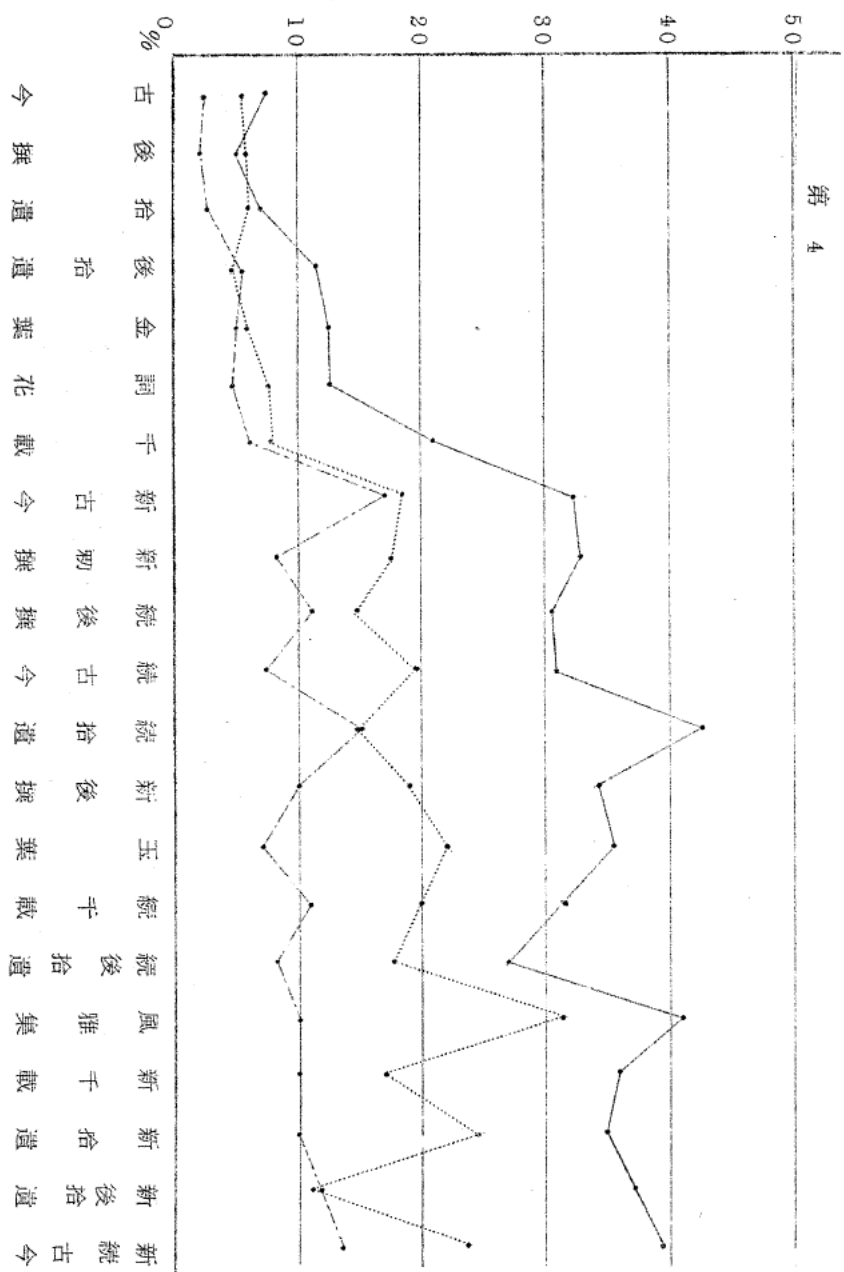


表 3

雑の歌の体言止め			恋の歌の体言止め			四季の歌の体言止め			
	体言止 め歌数	総歌数		体言止 め歌数	総歌数		体言止 め歌数	総歌数	
57	8	188	31	11	360	79	27	342	古今集
61	14	229	25	14	568	53	27	507	後撰集
69	10	144	34	13	379	80	21	262	拾遺集
51	17	329	61	14	229	118	50	424	後拾遺集
61	10	162	56	10	180	126	40	325	金葉集
91	13	142	60	5	84	126	20	159	詞花集
90	22	243	63	20	317	212	101	476	千載集
188	79	418	166	74	446	322	227	706	新古今集
170	54	317	83	33	395	328	145	442	新勅撰集
146	39	237	116	44	378	304	161	531	続後撰集
197	74	375	73	35	444	303	212	689	続古今集
145	36	248	157	52	331	430	202	470	続拾遺集
189	68	359	104	46	442	343	182	531	新後撰集
225	179	793	76	44	577	353	371	1037	玉葉集
200	80	400	119	70	596	312	221	708	続千載集
183	48	261	80	27	399	268	134	500	続後拾遺集
314	138	630	97	43	450	403	366	898	風雅集
177	93	525	103	65	631	361	235	734	新千載集
256	101	394	106	49	461	352	238	676	新拾遺集
112	23	205	121	41	339	373	215	576	新後拾遺集
244	115	471	143	79	553	394	293	744	新統古今集
182	1280	7050	93	789	8497	300	3519	11737	計



三	恋		物	騷	離	冬	秋			夏			春		
	二	一					下	中	上	下	中	上	下	中	上
	(下)	(上)	名	旅	別										
	1	3	5	2	0	2	6		7	5	4		3	古今集	
4	2	2		3		4	1	4	3	4	8	1	2	後撰集	
3	3	1	2		2	4			8	5			4	拾遺集	
4	5	3		2	3	6	5		21	8	5		5	後拾遺集	
	6	4			1	7			10	9			14	金葉集	
	2	3			1	2			9	3			6	詞花集	
6	6	3		10	2	15	17		28	15	9		17	千載集	
14	10	9		29	6	43	30		60	37	25		32	新古今集	
8	4	4			7	27	22		35	15	18		28	新勅撰集	
15	8	2		9		19	9	31	23	21	19	20	19	統後撰集	
12	8	7		27	3	47	37		48	23	19		38	統古今集	
16	7	9		18		34	37		37	28	30		36	統拾遺集	
17	6	4		22	2	28	33		44	28	21		28	新後撰集	
13	15	6		44		74	86		65	63	44		39	玉葉集	
26	4	13		31		43	39		39	41	32		27	統千載集	
8	7	5	3	14	2	26	26		22	18	23		19	統後拾遺集	
8	19	1		14		82	55	45	31	60	28	36	29	風雅集	
21	11	9		21	1	53	51		60	38	26		37	新千載集	
16	9	10		32	2	40	60		40	28	34		36	新拾遺集	
15	6	4		23	1	34	32		43	44	28		34	新後拾遺集	
25	14	10		30	0	40	49		63	45	42		54	新統古今集	

賀	秋	雜 春	仲 樂 歌	大 歌 所 御 歌	雜 體	五	四	三 (下)	二 (中)	雜 一 (上)	哀 傷	賀	六	五	四	恋
				5	3			4		4	0	2			1	4
							4	5	3	2	1		2		1	3
4	8	5	7					4		6	5	0			0	6
						5	6	3	2	1	6	0				2
								3		7		1				
								7		6		2				
								1	5	16	3	6			1	4
								18	27	34	12	10			7	34
						25	5	8	16			6			7	10
								10	9	20		10			12	7
								21	17	36	10	13			2	6
28	25							9	4	23		17			7	13
								11	17	40		10	1		9	9
						21	15	31	45	67		13			3	7
					6			5	18	57	9	16			7	20
								8	22	18	5	7				7
								26	86	86		8			5	10
								14	32	47	11	15			6	18
								8	28	65	11	14			4	10
52	32							11		12		10			4	12
								24	30	61	10	18			12	18

俳	積	禪	〃	雜	
諧	教	祇	歌	恋	
					古今集
					後撰集
				2	拾遺集
5					後拾遺集
					金葉集
					詞花集
	8	9			千載集
	4	9			新古今集
	7	7	4		新勅撰集
	9	23			統後撰集
	10	15			統古今集
	14	16			統拾遺集
	10	14			新後撰集
	20	15			玉葉集
	12	22			統千載集
	6	7			統後拾遺集
	16	12			風雅集
	21	21			新千載集
	17	14			新拾遺集
	6	6			新後拾遺集
	9	19			新統古今集